

植物研究雜誌

第四卷 第五號

昭和二年五月三十一日
發行所 東京 津村研究所

○大正十一年二月大阪市廳へ開陳シタ大阪植物研究所ノ趣旨目的

牧野 富太郎

此ニ創始セントスル大阪植物研究所ハ人生ト密接ノ關係アル有用植物ノ研究調査並ニ其發表ヲナスト同時ニ一面其基本トナルベキ我邦全般ノ植物ノ研究調査並ニ其發表ヲナスベキ處デアル、有用植物トハ即チ工業用植物(油脂、纖維、護謄、紙、染料等ノ植物)藥用植物、農産植物、食用植物等總テ人生ト關係アル植物ヲ指スノデアル

此研究所設立ノ實現セシ時ハ特ニ大阪ヲ中心トシテ其附近ノ有用植物ノ調査ヲ開始センコトヲ期ス

試ミニ茲ニ香油ノ製造ヲ營マントスル人アリト假定シ其原料ヲ何レカニ得ンガ爲メ此研究所ニ相談ニ來ルトスレバ、研究所ニテハ既ニ平素ニ研究シ置ケル材料ニ就テ説明シ且其見本ヲ提示シテ其要望者ニ満足ヲ與フルコト、スル、即チ今假リニ其材料ノ例トシテたむしばト稱スル植物ヲ舉グルナラバたむしばハ植物學上もくれん科ニ屬スル樹木デ *Magnolia salicifolia* Maxim. ノ學名ヲ有シ其形狀ハ云々、其產地ハ云々、其產量ハ云々、其實物ハ此ノ如キ形狀ヲ有スルモノ(標本並ニ圖畫ヲ示ス)、其一般ノ名稱ハ是レデ各地方ノ方言ハ是レ々々ト指示セバ其人ハ始メテ此ニ其目的ノ材料ヲ知り得ルコト、ナル、ソシテ其之レヲ製スル方面ノ事柄ハ工業試驗所ノ方ニ行キテ相談スレバ其處デ其委曲ガ分ルコト、ナル

此研究所ハ上ノ様ニ其材料ノ研究所デアル、今日本デ此最モ大切ナル材料ノ研究所ハ一ツモ無イカラ我日本ノ工業ヲ發達セシムル上ニ就テモ遺憾ノ點ガ少クナイ、此ノ様ナル材料ノ研究所ハ製造ニ對シテハ是レ恰モ車ノ

兩輪、鳥ノ兩翼ノ様ナモノデ決シテ偏廢シテハナラナイモノデアル事ハ少シク深ク考フル時ハ直グニ解カルコトデアル、故ニ工業ノ發達ヲ圖ル爲メニハ是非トモ其之レニ用ウル原料ノ研究所ガ無クテハナラヌ譯デアル、工場ガ出來テ材料ガ無イデハ仕事ガ出來ヌコトハ誰レデモ直グ判カルデハナイカ

人間ニ有用ナル、即チ人間ニ利用セラルベキ材料ヲ植物界中カラ撰ビ出サント欲セバ是非トモ徹底的ニ其全植物ノ根本調査ヲ遂ゲ置ク必要ガアル、其レ故此研究所ハ一面ニ此事業ヲ遂行スルヲ一ノ大切ナル役目トスル、即チ以前ニ農商務省ガ石炭並ニ金銀銅鐵等其他有用ナル礦物ヲ得ンガ爲メニ日本全國ノ地質調査ヲ遂行シタト同様ニ今日吾人ハ吾人ノ社會ニ有用ナル材料ヲ得ンガ爲メニ我邦全植物ノ調査ヲ行ハントスルノデアル、此ノ如ク徹底的ノ研究調査ガ出來テ其結果此ニ始メテ應用ノ事モ語ルニ足ルベキニ至ルノデアル

標本ノ蒐集ハ後來其種類ニ於テ、又其數量ニ於テ、又其品質ニ於テ此ニ日本第一ト評アル様ニ致シタキ希望ヲ有スル、若シ假スニ相當ナ年月ト相應ナ費用トヲ以テセバ充分ニ此良結果ヲ將來ス自信ノ不肖ニ之レアル事ハ特ニ之レヲ此ニ斷言シ置クニ憚ラナイ、若シ夫レ此ノ如ク其蒐集等ガ日本第一トノ定評アルニ至レバ之レヲ大阪ノ一名物トシテモ少シモ差支ヘハナイト思フ

研究所ニハ種々ナル有用植物ノ原標本並ニ其製品等ヲモ陳列シ此實物ノ指教ニヨリテ主トシテ大阪人並ニ一般觀覽者ノ此方面ノ知識ノ收得及ビ増進ニ資シ其方面ノ發達ヲ促進セシメタイト希望スル

大都會デアル大阪ニ天產物即チ動植礦ノ陳列場無キハ大阪ノ文化的設備トシテ非常ナ缺陷ト謂ハネバナラナイ(實ハ是レハ我日本トシテモノ大ナル闕典デテル)ソレハ人間ノ衣食住ノ材料ハ主ニ天產物ヲ利用シタモノデアルコトニ想到シテモ直グ解カルコトデアル、ソレ故後來ハ西洋各國ニ既ニ設ケアルガ如キ天產物博物館ニ此研究所ヲ進歩發展セシメバ最モ有益ナラント思フ、此ノ如キ博物館ハ國家トシテ最モ切要ナルモノナルニ拘ハラズ我邦一モ之レヲ有セザルハ實ニ慨歎ノ至リニ堪ヘザルモノデ我國人ハ一向ニ知識ヲ尊重セザル人間ト評セラ

レテモ致方ガナイデアラウ

又此植物研究所ガ愈ヨ大阪ニ實現セラル、曉ニハ大阪方面ノ教育上ニハ實ニ非常ナル便益ヲ與フルコト少シモ疑フ餘地ガナイ、例ヘバ目下各小學校ナドニテハ植物ノ名稱ナド分ラヌ爲メ各教員ハ平常大ナル不便ヲ感ジツツアルト聞ク又大阪ニテハ之レヲ聽ク學者ナキ爲メ尙更ニ困却シ居ルトモ聞ク從テ教員ガ實地教授ニ學生ヲ野外ニ連レ行ク等ノコトハ少シモ實行セラレズニアル狀態デアル、若シ幸ニ此研究所ガ出來レバ此等ノ缺陷ハ直チニ醫スル事ヲ得ベク茲ニ現狀ヲ一新スルコトハ實ニ容易ナコト、信ズル

此ノ如キ、國家トシテ又人生ニ對スルトシテ、極メテ有用(實際的ノ)ナル機關ノ出現ハ大阪市ノかんばんとシテ同市ヲ飾ルモノ、一ニ算ヘテモ敢テ不可ナキコト、信ズル、又大阪ガ他ニ率先シテ此有用ナル機關ヲ設クルコトハ大阪市トシテ他ノ都市ニ誇ルニ足ルモノデアルト思フ

又餘リ廣大ナルモノニハ及バヌガ此研究所ノ附屬トシテ一ノ植物園ヲ有シタイ、是レハ無論植物ノ研究上ノ必要モアルガ又何時ニテモ生キタ見本ヲ見ル事ガ出來ル様ニ用意シテ置クコトハ實際極メテ必要ナコトデアル

○薔 軒 獨 語 (其十六)

薔 軒 朝 比 奈 泰 彦

○きいろすつぽんたけ (新稱)

本邦ニ産スルすつぽんたけ屬 (*Thyphallus*) ノ輩ハすつぽんたけ (*T. impudicus* Fr.) ちつねのえふで (*T. fungulosus* Fisch.) へびのあんどう (*T. aurantiacus* E. Fisch.) ノ三ツデアル、然ルニ大正十四年七月七日富士大宮口二合目ノ林地ニ於テ全形全クすつぽんたけニ一致シテ居ルガ帽ノ色が黃色デアルノガ異ナレル一種ヲ得タノデ取り敢ヘズ之ニきいろすつぽんたけト云フ名ヲ附ケテ置タ、所ガ昭和二年六月四日武州西多摩郡日原ニ